

宿世と来生 (下)

金子大榮

(大谷大学名譽教授)



功德の宝

「真宗概論としての教行信証の概要」という演題で、こちらへまいります前に、六日間大学の集中講義で話をしましたことをここで繰返したいのであります。教巻には「真実の教を顕さば、則ち『大無量寿経』是れなり。斯の経の大意は、彌陀誓を超発して広く法蔵を開きて、凡小を哀れんで遷んで功德之宝を施すことを致す、釈迦世に興して道教を光闡し、群萌を拯ひ、恵むに真実之利を以てせんと欲す。是を以て、如来の本願を説くを経の宗旨と為す、即ち仏の名号を以て経の体と為るなり。」という言葉がある。

わたくしはこの言葉の意味合いがわからないで困ったんです。昔から講釈本も読みましたけれども、文章のすじがわからないのであります。ところが今回はああそうであつたというような気持になつたのであります。「彌陀誓を超発して」という彌陀は、阿彌陀、無限者、無限の大悲である。その無限の大悲は「誓を超発して」誓とは約束です。すなわち衆生との約束であります。阿彌陀は無限者であるが、その無限者は迷える衆生と運命の約束をして衆生迷えばわれも迷う、衆生悟るときはわれも悟るといふそれが誓ひであります。「超発して」超発ということとは、もう少しわかりやすい言葉をと 생각합니다が、どうしても、「超発」といわねばならぬでしょう。超えて発するのであります。

す。これは昔からの説明では「発願諸仏に超えて」ということであるといわれています。これは前回の話でご了承になるでしょう。薬師とか阿闍と観音とか普賢とか文殊とか、そういうことを超えた、そういうふうな部分的なものでない無限の願いをここで起こしてということでありましょう。そうして「凡小を哀れみ」とあるその凡とは凡夫ということであります。小とは小さい人間ということであり、れども、私は自分のことなどを思いますが、何と適切な文字であろうかと思っております。ただの人間である。どこも人と違ったところのない人間が凡であります。そのうえ人間が小さい。偉そうなことをいうておるがあれは人間が小さいといわれるその小人であります。その「凡小を哀れんで選んで功德之宝を施すことを致す。」この「選んで功德之宝」というのは名号ということになるのです。その功德とはいかなるものか。辞書で調べてみますと、どうやら幸福ということのようであります。しからば功德之宝ということは修道院で修行するような人々には要らんものではないか、どうしたら人間一生涯はほんとうに無事息災でいける

かという人間にピタリとはまるものであります。したがって「選んで功德之宝を」という裏には、みんな幸福を求めておるんだけれども、求めて得ない、手に取ってみると不幸である。幸福を得たい得たいと思うておるけれども得ることができない人間に、これこそほんとうの「功德之宝」であるというのを私たちに与えたい、これが仏の御心である。

群萌の宗教

次で「釈迦世に出興して道教を光闡し」とあるお釈迦さまがこの世の中へ出て道教を説かれた。その道教とは仏道であります。お釈迦さまは仏道をいろいろお説きになったが、さて何のために仏道をお説きになったかというところ、
「釈迦世に出興して道教を光闡し、群萌を拯ひ」とあります。ここに群萌という字が出てきた。凡小という字も適切な字であります。ここでは群萌という字が出てきています。先ほども申したのでありますが、宗祖親鸞にいたしますと、凡小ということは、あるいは京都にあつて法然上人のお弟子であつたときにもおわかりになったかもしれませ

んが、群萌というような感じはおそらく越後へ流されて初めてヒタヒタと感じられた字でありましょう。法然上人の教えも凡夫のため、浄土の教えは凡夫のためであって、偉い人のためではない。こういうてありますが、まだ凡夫というだけでは心がけのいい凡夫ということにも考えられましよう。それが群萌ということになれば、これは小さいとか大きいとか賢いとか愚かとかいうことではない。要するにもえいづる民草ですから、大地からでて大地に没するところのそれが群萌であります。その「群萌を拯ひ恵むに真実之利を以てせんと欲す。」と、ここにまた利ということが出てきた。利は利益であります。この功德と利益とどこが違うのですかという問いをハワイの大巴さんが寄せられたことをい思い出した。その功德と利益という字をそこへ用いられてある、これが真宗というものである。道元禪師の書物の中にも功德だの利益だのという言葉があるかもしれませぬ。けれどもこの親鸞の言葉をずっと見ますと、「凡小を哀んで選んで功德之宝を施すことを致す」「群萌を拯ひ、恵むに真実之利を以てせんと欲す。」ほんとうのご利益、ほんとうの仕合せを与えたいというのが彌陀の願いである。そこで「是を以て」と言及せられてある。どうして

ここへ「是を以て」という字が出てきたのか、初めて私は驚いたのであります。「是を以て如来の本願を説くを経の宗教と為す、即ち仏の名号を以て経の体と為るなり。」如来の本願といえどももちろん人間のための本願でしょう。しかしその人間は衆生としての人間でないならば人間を救う本願の法も名号でなくてもよいのかもしれないませぬ。そうすれば「悪人なほ往生す、いはんや善人をや」ということにもなりません。けれども問題は、われわれは万物の霊長だというておるような、そういう人間ではないのです。大地から生え出た庶民が対手であります。たとえ文化人といわれるようになっても、庶民の心を離れることのできない、その者のために初めて本願というものが出てきたのである。「是を以て如来の本願を説く」こういうわけであるから初めて「善人なほもて往生を遂ぐ、いはんや悪人をや」といわれるのであります。

話は脱線しますけれども、この間大阪へ行きましたら、ある人がお出でになり「歎異抄」に善人悪人ということがあるでしょう。あの善人とは先生族のことですと語られました。学校の先生も先生族である。坊さんもお説教なさるから先生族に違いない。その先生族のことを善人という

のである。したがってその先生族では廻心せねば助からんということになる、なるほどそういういかえればはつきりわかります。みんな先生族になっているからわからない。先生といわれるほどのばかでなしという言葉を思い出しました。その先生族でも御法の話をなさるんだから、いわんや先生ではないものおや、それは群萌というものでしょう。その群萌のための如来の本願である。それは即ち原始的な魂を愛し大悲して、生きとし生けるものをみな浄土にあらしめたいという如来のこころであります。

後世の道

「是を以て如来の本願を説くを経の宗教と為す、即ち仏の名号を以て経の体と為る」ここに南無阿彌陀仏というものが出てきたのである。よいことをせよというみりでもない、施しをせよというみりでもない、ただ南無阿彌陀仏と、無限大悲の仏の心を、手を合わせていくというところだけが、生きとし生けるものがみんなそこへ落ちつくところの大いなる道であるということを説いたのが『大無量寿経』である。

こういうことは、別に改まって申すべきことではないかもしれませんが、聖教を読んでわからないのがわかったときの喜びはふかいものであります。機深信という言葉の中に、さきの世とのちの世ということがある。その後世の助かる道ということはどういうことなのであろうか。この間も大学の若い先生が来てお話をなさいました。昔の書物に、後世の助かる道という言葉がある。あれは要するに現生生活の懺悔でしょう。フカザメよ心安かれ人間道に異ならずで、みんな同じようなことをやっておるのである。こうして互いに殺し合わなければ生きておれないような生活がどこまで続くのであろう、こう思うと、こういう生活は今限りとしたという願が後世の救われる道ということになったのでしょ。こうして人間生活を懺悔したところに初めて人間の動物性が脱皮せられる、人間の動物生活が燃え尽すのであります。それができてこない限りは、どこまでいっても動物的な生活しかできないのであります。こうして人間も動物も同じことであるなあという悲しみが機となつて永遠なる彼方に仏の世界へのがれというものが出てくるのである。そこに宿世と来生というものも光をもつものとなるのであります。

したがってその如来の本願によりて往生する浄土も来生のさとりでありますが、その来生は原始人に思想された来世とは別のようにあります。浄土とは彼岸の世界であり来生の光である。それは今生の光となっているのではあるがその光の源は来生である。それは人間の生活を懺悔するものとしては自然の感情であります。人間を照らして、人間を救うその光は来生から来るものである。

無生と往生

しかしながら、そのときに出てくる来生は、迷いの続きの来生ではない。そのときの来生は、生といえども生ずることのない無生の世界である。浄土は無生の世界である。いいかえれば、いままでのように考えてきた生はなくなってしまう。「生として当に受くべき生無く、趣として更に到るべき趣無し、己に六趣・四生の因亡じ果滅するが故に即ち頓に三有の生死を断絶す故に断と曰ふ」これは今生を限りとして、念仏者は互いに殺し合わなければならぬような生活をぶち切ってしまうということである。そうしてそこに開け来たるものは無生の世界、大涅槃界である。こう

いうふうに来生が開けてくるのであります。こうして暗い来生が明るい来生として開けてくるそれが無生の来生であります。

その無生 (Amita) という字は (A) は無、(mita) は生ということ、したがって無生とは生まれるということのない境地であります。しかるにその (Amita) という梵語に未来、来生という訳語があるのです。これは仏教の特別な言葉としてではなく、多分インド人の感覚なのであります。無生という言葉には来生という意味を持っておいたものらしい。それが浄土の来生というものである。その来生は即ち無生の世界である。それで曇鸞大師は、往生は浄土を願う人間の感情であって、ほんとうは無生であると説明しておられます。この説明は、その理解の仕方もあるでしょうが、わたくしどもの考え方としては両立するんです。往生は、ここで死んで、そして地続きのどこかがあって、時間続きにそこへ行くのであるとは考えておりません。けれども、親がなくなれば親待つところを思い、子がなくなれば彼の世の仏と拜むというような感情はもっております。それが凡夫の情というものであるとしても純粋なる感情ではないでしょうか。こうして無生であるということ、そこに生

まれるということとは矛盾しないのであります。われわれの素直な智慧は、浄土へ参らせていただくのであるところと同時に、もうこれで迷いはおしまいであるという喜びとをもつことができるのであります。こういう意味において来生という言葉は懐しいのであります。来生の光というものがあって現生を照らすのである。その来生とは死の帰するところである。それが一切の現生の問題を解消するのであります。しがしてそうあらしめるのが念仏であります。だから念仏を申せばその智慧によって人間の生活が無礙となるのであります。そして人生の終局として大涅槃の境地に至るのであります。その人生の終局がひるがえって生のよりどころとなるのである。即ち死の帰するところをもって生のよりどころとするのである。

宿世の光

しからば死の終るところを未来とすれば、生のよりどころは本来ともいうべきものでありましようか。ここに未来なものとは本来的なものであるということが思われる。しかしその本来は、未来に対して過去というてもいいでしよ

う。それは本来の光に包まれたる過去であります。したがってそれは光ある宿世といってよいのでありましよう。その宿世の御縁によりて、今日、本願を信ずることとなったのである。如来の本願とは宿世からわれらにかけられてあったのである。だから本願を信じて浄土へ往生するということは本来のべきところへ帰るのである。そこは懐しい魂のふるさとである。思いかへせば私は三十くらいの時分から「そこはまだ見ぬ世界にて、また懐かしい魂のふるさとである」とうたい続けてきたのであります。その魂のふるすとは、原始人が原始の生活をしたうちにも感じられる、如来の本願はそのときからわれわれ衆生の上に照らされておったのである。それは長き迷いの間でもうむことなく照らされた光であった。その光によって今日われわれは念仏に親しむ身になったのである。この世において仏法を聴聞するのはさきの世において祇園精舎ののきばのズメであった時、お釈迦さまのお説法を聞いたのが縁であるというような話がある。それは童話であります。いかにもそうであらう。そうに違いないと、いいたいものがあります。それは迷いが深ければ深いだけその迷いから出てきたところの因縁をたずねてみると遠いところからの由来が

ある。ということでしょう、こういうことが庶民的なものではないだろうか。

しかるにその原始的な純情が消えて前時代的な知識となり、邪教だ迷信だとかいわれるようなものになった。それが現世利益の宗教であるに違いない。そういう点からいうと、現世利益の宗教と真宗とが、全く違っておりながら母体を同じくしているものである。従って、真宗の教えを聞かしてもらっておる私たちは邪教に惑うことはないが、邪教に惑う人の気持もわかるのであります。惑う人の気持を聞いてみると、それが人間の根性である、それよりほかに人間の根性がなければこそ、如来の大悲は「功德之宝を施す」とか「真実之利」を以てしようとかいうことになったのであろう。だから真宗の教えは、念仏を申すことのみがほんとうの利益である、念仏することのほかにほんとうの幸福がないということでありませう。こうして、利益とか幸福とかいうことについての人間の判断が變つてくる。本願を信じ念仏を申さしてもらうと、すべての判断がつくことになる。いままでは幸福ということ、財産があつたり家族が無事であることであると思つておつた。しかしそれがほんとうに幸福を感じさせるのであろうか、そうである人

がほんとうに心の底からわしは仕合せ者であるというておるだろうか。幸福の材料は幸福そのものではない。ほんとうの幸福は、念仏して一如の浄土へ生まれしめられる身になることである、こうして念仏にまさるべき善がないということとは念仏にまさる利益がない、念仏にまさるべき幸福がないということである、かように判断することになる。それが念仏にはもろもろの善法を撰し、もろもろの徳本を具うということでありませう、念仏を申す中には一切の功德が撰められておる。どんな利益だつて具わらないものはないのであります。

こうして、無限の光である仏の世界は有限なる人間の生活から見れば当然来生でなくてはならない。またそれが本来の世界であるということをおぼえれば宿世でなくてはならない。その宿世の縁と来生の光とによりて現生における念仏者の生活があるのであります。これは私としてはご縁のあるごとに幾たびも話して来たように思うのであります。が今日もうしましたことは、そういう事実の中味として、人間が地上生活を始めてからの、いわゆる原始的なものを考へて見たのであります、その原始的な生活には互いに害し合つておるが、どうしてこのような生活をしなければ

ならんのであろうかという悲しみも持つておるのである、それを救うところに浄土の願いがあるのである。それは人間を万物の霊長と考えて、動物とは全く違うという立ち場にある宗教ではない。衆生としての、生物としての人間が浄土教の目当てとするものである。という意味において庶民の宗教であるといつていいのであろう。

佛法の減びる時

しかしわたくしはこの話をするたびに思うのであります。こういうふうに大きな声でいうてみても、近ごろそんな庶民なんてなくなつてしまつたではないか、みんなインテリになつてしまひ、みんな文化人になつてしまつて、群萌というようなものではなくなつてしまつたのではないか、そういう点からいへば真宗の教えは、もうなくなるのがほんとうかも知れません。それはお釈迦さまも知つておられたらしいのであります。

「経道滅尽す」といひまして、仏教もなくなる時がある。しかしまたお釈迦さまは、特別の慈悲をもつてこの法だけは百年の間を残しておくといつてある。あれもわから

「わたしの善知識」原稿募集

わたくしたちが、仏の教えで生かされる生活をするようになったのには、いろいろのご縁があつたこととおもわれます。そのなかには仏教に近づくために、お育てを蒙つた恩人もあつたことでありましょう。また、みなさんの周囲には、感心な篤信者もおられることとおもわれます。それらの方がたの行いや、語られることは、わたくしたちに与える影響は大きく、もつとも身じかに、教えを知ることにもなります。

それらの方がたをみなさんにお報せすることも、本誌の一つの目的でもあります。そこで、街の、村の、このような方がたを知るた

めに、みなさんから原稿を募集することになりました。それらの方がたの具体的なお話を、原稿にしてい

ただきたく存じます。

一、原稿枚数三枚

二、締切期日なし

三、内容が本誌に適當であるものは、本誌に掲載いたします。

四、掲載したものは、薄謝をさしあげます。

五、投稿原稿は返却いたしません。もし、その原稿の必要な人は、コピーを取つておいてください。

六、送り先 東京都千代田区大手町一ノ四、大手町

ビル五四一号室「在家佛教」編集部

んお経ですね。お釈迦さまは特別の慈悲をもってすべての仏法は滅びてもその後の百年だけ真宗の教えを残して下さるそうであります。それならば、もつと長く二百年でも千年でも残してくださいとは思いますが、百年残すというのは、妙なことと思いましたが、昭和二十六年の安居に「大無量寿経」の講義をしてふかく感激せしめられました。

この百年ということは、お前が生きおる間ということであらう。なるほど百年延ばしてもらえば、わたくしの生きおる間は滅びない。本願にあらざれば救われない人間のあらん限りは、汝のあらん限りは法を滅さないということでしょう。

それが「親鸞一人が為なりけり」のおこころと思われました。最後の一人でも、群萌を代表する人間があればこの法は滅びないということであります。

時と処とを超えて

そう思うてみますと、東京へ来ますとこれだけ集まっていただく。田舎へ行くとまた相当の人が来られまして、にぎやかなことだと思ふのです。仏教の雑誌や新聞を見る

ど、いまにも仏教はなくなるといひますけれども、私は決してそうは思わない。にぎやかです。

一人でもにぎやかですから三人でも五人でもあるということは大いににぎやかであります。そしてその人々はみんな最後の一人である。しかるにそれが仏のお心ではみんな最初の一人らしいです。

彌陀初会の聖衆は

算数のおよぶことぞなき

浄土をねがはんひとほみな

広大会を帰命せよ

という御和讃があります。阿彌陀仏が仏になられたときに集まった者は無量無辺である。どうしてそんなにたくさんあるんですかという、これから往生する者も彌陀初会の大衆である。

こうなると最後の人というのはない、これからあとで念仏を称える人もわたくしたちのさきに往生したのもも仏の立場からいうと、みな最初の人間であるということであります。ここには宿世といつても来生といつても時間を超えてのものであることが思い知らしめられるのであります。